Rain drops

レモンスカッシュ七号

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺達はある日、遊びに行ったデパートで出会ったんだ赤い目の優しいあの人達に……

目　次

設定＋おまけ ―― 1
始まりのデパート ―― 4
出会う紅い瞳 ―― 7
出会う瞳 ―― 10
出会う瞳―2― ―― 13
夢物語に沈む ―― 16
入団準備中 ―― 21
帰宅　文月家!? ―― 24
入団準備ｐａｒｔ２　～過去の入口～ ―― 28
長い夏の午後 ―― 32
水無月　賢太郎の過去 ―― 35
消えた少女 ―― 38
彼の知らない真実 ―― 43

設定＋おまけ

”キャラ紹介”の時間です。

オリキャラ１

水無月　賢太郎　年齢：１４歳

能力

目を移動（そら）す能力

相手の視線、目線を自由に動かせる

（キドとモモの能力をたしたようなもの）

オリキャラ２

文月　風太　年齢：１４歳

能力

目を開く能力

触れたことがある人の能力を使える。

しかしその半分くらいしか力がない

例：キドの能力だったら２．５ｍが１ｍ以内みたいな

この二人のオリキャラで書いていきます。どうぞよろしく。

おまけ

ケンタローｓｉｄｅ

ｐｐｐｐｐカチッ

ケンタロー（以後ケン）「ふぁ～」

朝6時いつも通りの時間　顔を洗いに洗面所へ向かう。
キッチンから朝ご飯を作る音がリズミカルになっている洗面所で顔を洗って朝ご飯を作っている人の所へ歩いてく。
ケン「おはようございます」
キド「あぁおはよう」
ケン「セトさんはもうバイト行っちゃいました？」
キド「いや、まだ居るぞ　なんかあったのか？」
何もないですと言いながらソファに腰かけた。するとセトさんが部屋から出てきた
ケン「おはようございますセトさん」
セト「おはようっす」
キド「おいセトこれ」
セト「おぉありがとうっす　行ってくるっす」
キド、ケン「いってらしゃい」
セトさんがバイトにいってしばらくして7時半位で部屋から「やべぇ寝坊したー！」と言いながら出てきた物体に俺は
ケン「おいフウタ、今日休みだぞ、お前何やってんの」
フウタ（以後フウ）「うっそだ～そんな訳あったわ」
そう今日は土曜なんだ、だから学校はない
ケン「そうそう、だから着替えてこい、キドさん俺ら着替えてきます」
部屋のドアを開けて見えるのは綺麗にも汚なくも見える部屋だった
クローゼットを開けて、適当にとったウィンドブレーカーのしたとTシャツと無地で黒いパーカー着てドアを開けたら
ちょうどフウタも出てきていて、モモさんが朝ご飯を食べていた
フウ「今日も補習ですか？土曜なのに」
モモ「そうだよ！休みなのに！休みなのに！」
ケン「わかったから静かにして」
耳を塞ぎながら
キド「キサラギ時間だぞ」

モモ「えぇ！もうこんな時間、行ってきまーす！」
キド／フウ／ケン「「いってらしゃい」」
キド「さて、朝ご飯食べるか」
フウ／ケン「「食べる」」
朝ご飯を食べて８時、カノが起きてきた
カノ「おっはよーう」
フウ／ケン「「おはよう」」
カノ「なになに、今日はキドのご飯なの」
そう、俺たちメカクシ団の食事係はキドとフウタと俺だ
残りのメンバーは起きるのが致命的に遅い、
シンタローはまずヒキニートだから論外だし、
エネはシンタローがこないとこないとあんまこないししかもモモさんもいないし、
マリーも朝は早くないからまだかかると思う
つまり、割愛!!

始まりのデパート

ｐｐｐｐｐカチッ
ケン「うぅぅん」
朝７時、休日にしては早めに起きた俺は二段ベットから降りる。
目に映るのは、誰も寝ていない一段目のベット。
８月の頭から、母さんの実家に帰っている弟のベットだ。
帰省中の為、静かな家の中を見渡す。
８月１４日の始まり。

蝉の鳴き声を左耳で聞き流しながら、反対の耳に赤いイヤホンをはめる。
なぜこんなことしているのかそれはひｔドンッ
フウ「待ったー？」
俺が待っていた物体が来た。
ケン「いや、うん待った、遅い」
フウ「ごめんごめん走って来たから許して、
　てゆうか暑くないの？」
ケン「それはお前もなっ」
そう今の俺たちの服装は、
ウィンドブレーカーの下に黒いと紺色のパーカーという何とも
季節外れな格好だ。
それに俺は黒いネックウォーマーで
そいつは白い手袋を着けていた。
ケン「新しいヘッドフォンじゃん、前のは？」
フウ「え、壊れたから一個前の奴だよ。どうした？
　大丈夫？」

ケン「え？なんで？」
フウ「だって、新しいの買いにいくって昨日言ったやん」
ケン「そー言えばそーだったわ」
無駄話をした後、フードを深くかぶり直してデパートに歩を進めた。
フウ「ちょ、ちょ待ったー」
ケン「あぁね、わかった」
その瞬間、俺たちの姿は見えなくなった。
フウ「やっぱ、良いねこれ」
ケン「そうかな、周りから、見えなくなったり、視線集めたり面倒だけど」
今の俺たちの目は、紅く輝いている。
ケン「よしっ、さぁいくよ」

俺たちは誰にも見られることなく、デパートについた。
フウ「さて、ヘッドフォンはどこでしょうかねっと」
ドンッと俺が人にぶつかった。
ケン「すいません、大丈夫ですか？」
??「いや、大丈夫だ　すまなかった」
ケン「あっはい、あれっ」
フウ「どーしたの」
ケン「いや、何でもないよ
　それより、家電は何階？」
フウ「7階、7階」
ケン「さっさと、いこうよ、人が多い」
フウ「うん、けどあれ見てみ」
エレベーターの近くには、死ぬほど、人、人、人
ケン「階段は？」
フウ「えっ」

ケン「いやいや、「えっ」じゃねーよ死ぬ」
風太は、まぁね、と言いながら階段を目指した。
家電品売り場についたら
フウ「ちょっと遊んでこーよ」
と、パソコン用品売り場を指差した。
ケン「ん、いいよ」
すると夏なのに赤いジャージを着た人が
??「あぁ……すみませぇん……えぇと…
…ＰＣよぉひんのうりばって……どちらになりましゅか……」
超ぼそぼその声で言った。
俺たちは、非常にビミョーな顔になり、店員さんの
神対応に驚いていた。
赤い色と言えば、さっきぶつかった人が消えるとき目が紅かった。
消えると言っても相手にも、消えたように見えただろう

それからしばらくＰＣ用品を見て回っていたとき

左耳から言葉にし難い爆音がデパートに響いた。

出会う紅い瞳

―風太ｓｉｄｅ―

僕たちの耳に爆音が響いた。
どこからか叫び声が聞こえる。
白いシャッターが無情におりてくる。
ケン「フウタ！外に人がいたはずだ！その人と合流してこれをなんとかしろ！」
フウ「ケンちゃんは！」
ケン「俺は中からなんとかする！」
フウ「わかった！」
ケン／フウ「さぁ！　試合開始だ！」

僕はシャッターの外に出て、ケンちゃんの言ってた人を探す。
そういえば、どんな人か聞いてない！
フウ「さて、どうしようか」
フウ「まずは」
フードをかぶり直して、ヘッドフォンを付ける。
今の僕の目は紅くなってると思う。そして目を閉じる。
フウ「見つけた！」
目を開け、走り出す。

前に３人の人影を見えた
会話をしているようだった。

??「あ、あの……誰からだったんですか？」
??「……馬鹿からだ……」
フウ「へぇ誰からだったんですか？」
??／??「ッ!!」
フウ「あぁ、名前ですか？文月風太です、よろしく」

??「あぁキドだ、よろしく……いや、そうではなくてな」
キド「なぜ、俺たちが見える！」
フウ「それは、今ですか？やることが今はあるでしょう？」
キド「そうだな、キサラギ」
キサラギ？「えっはっはい如月桃１６歳です」
フウ「それで？今のメールは？」
キド「あぁ…これだ」
すると、キドさんはキサラギさんに携帯を放り投げた。
「件名：捕獲された～！
本文：そっちの様子はどうですか？こっちはなんとかやっています。
今みんなと並べられて座ってます！人生初の人質ってやつです！
あ！キサラギちゃんのお兄さんも捕まってるよ～！
なんと僕の隣にいます！それともう一人います！なんかキドみたいなんだけど！
というわけで記念に一枚（添付画像有り）
そんな感じでとりあえず近況報告でした。」
キサラギさんは添付画像を開くと手を縛られた人の背中とピースサインをする猫目の人と
ケンちゃんがいた。
キサラギ「あれ……この人は？……」
フウ「あぁ…その人は、水無月賢太郎っていう僕の友達です」
キサラギ「なるほど」
フウ「僕もケンちゃんも能力を持ってます
　僕は目を開く能力、ケンちゃんは目を移動（そら）す能力」
キサラギ「へぇ―」
僕が目を閉じ、作戦を考えていると皆さんは、猫目さんのことを話しているようだった
キサラギ「つまり騙し絵みたいな能力ってことですか」
フウ「なるほどね～」
キドさんが続けて、規模が小さいから自分だけっていっていた。

するとキサラギさんがキドさんに携帯をもらいメモをとっていた
スピーカーから声が聞こえて身代金を１０億円を３０分で持ってこいと要求していた
それが僕たちのタイムリミットだ
キド「……ってはぁ!?なんだ！この途中で出てくるやつは!!」
フウ「その作戦でいいんですね？」
キサラギ「あっ……あなたたちのこと考えてなかった!!」
フウ「いや……いいよ…二人でサポートにまわるから」
フウ「そうそう、僕たちは相手の視線を自由自在だから
　頭にいれとてね～」
さて、ケンちゃんと合流して、試合再開といこう！

出会う瞳

―賢太郎ｓｉｄｅ―

さて、捕まってしまって、そこそこ経つんだけど
いやー、なんとかする！と言ってみたもののそんな力ないに等しいんだよな～
いやまぁ俺の隣の人は、なんとか出来るかも！みたいな顔してる……
でもなぁ話しかけるのもなぁ。
まぁいいや
「っつ！」
突然リーダー格の男が後頭部を押さえて、顔を歪めつつ立ち上がった。
「……おい……！」
「は……？　ぐっ！」
リーダー格が後ろに立ってた男に近づいて、思いっ切り腹を殴った。
リーダー格がわーわー言ってるけど
俺の目には、風太と3人、人がいてそのなかの1人が何かを投げてるのを見ていたから
ケン／??「くくっ……ん？」
??「え……？」
笑い声に驚いた隣の人が俺と反対の男をみる。
??「……？　あ、いや、ごめんごめん、
あんまりおかしかったもんだから、つい」
ケン「え、いや、ついって……俺もおかしかった
笑っちゃったけど」
俺と一緒に笑った人を猫目と呼ぼう！
??「おかしいって何が……？」
猫目「え？まぁいろいろとね。」

ケン「うん……いろいろあったんです」
猫目「にしても君、さっきからずいぶんと面白い『目』をしてるね。」
ケン「確かに、何かしようかな～みたいな感じの」
??「なんでそんなこと」
にしてもあの人うるさいな
猫目「いやぁなんとなくだけど。でも実際どうなの？
　ーー秘策ありって感じかな」
ケン「それ、気になります。」
??「……この手の奴が解けて３０秒もあれば、
　確実にこいつらの目を丸くしてやれる」
ケン「すごっ」
猫目「うん、そりゃすごい。でもまぁ嘘って感じも
　しないなぁ。」
ケン「うん……勝算は？」
??「……くやしいけど……１００％」
ケン「ふっ」
??「別に信じなくてもいいよ。
　まぁこれ解けないだろうし」
ケン「いや、大丈夫です。俺は信じてますよ」
ケン「いつまでニヤニヤしてるんですか？」
猫目「いやぁだって、いいや……ええとたぶんだけど、
　もう少ししたらあいつまたアナウンスで
　喋りだすと思うんだ。でその時に『確実に』隙が
　できるから、そこからは君たちに任せるよ。
　頑張ってね」
??「はぁ？どういう意味だよ？ってそもそもまずこの
　縛ってんのが取れねぇて……」

「あぁ～クソむかつく。おい、もう1回話す。スピーカーから
　鳴らすように連絡しとけ」
「はっ、はい！」

流石犯罪者、めっちゃタコ殴りにしたクセにまだイライラしてんのかい！

猫目さんめっちゃ楽しそう。

また、放送をし始めた。

要約すると残り時間を１０分だって事と追跡したら爆弾を落とすらしいって事だった

出会う瞳―2―

??「なんてこと考えてんだよ……」
ケン「……すごい俺んちも射程圏内だ……」
隣の人はわりと……いや　かなり焦っていると思う。
??「くそっ……マジでいい加減に……」
焦りを通り越して苛立ちはじめて今にも、大声を出しそうだ。
ケン「焦らないで、大丈夫です。落ち着いて、落ち着いて」
猫目「そうそう、大丈夫。もう少しだから大丈夫。」
??「……んなのんびりしてる場合かよ！　オレの家族だって死ぬかも
しれないんだぞ!?」
その声がフロアに響きわたった。シーンと静まりかえる。皆キョトンとした顔でこっちを見てる。
視線が痛い、
猫目さんが「あらら……」みたいな顔をしてる。まぁ俺の顔もそうなってるんだろうな。
そこそこ予想通りだったんだけどね
リーダー格の人がこっち来て俺の横で止まってしゃがむ、つまり隣の人の前だ。
「てめぇは何なんだようるせぇな……」
その声に隣の人はガタガタと震え出した。「おいおい震えてんじゃねぇか。さっきの威勢はどうしたんだよ!?」
ニヤケながら髪を掴まえれて引き上げられる。

俺は目を赤く光らせた、手枷を取って手首を動かす。
ケン「……んで、このあとの作戦は？」
猫目「ん、？今おもしろいとこなのに……作戦？あぁ
雰囲気でなんとかなるでしょ」

??「……ろよ……」

「あ？　なんか言ったかよ。小さくて聞こえねぇなぁ」

これは、ヤバイな笑っちゃうよ

??「お前みたいなクソ野郎こそ、一生牢屋に引き籠ってろよ！」

ケン／猫目「「やっぱ（君）面白いよ……！（最高）」」

―風太ｓｉｄｅ―

??「お前みたいなクソ野郎こそ、一生牢屋に引き籠ってろよ！」

フロアに声が響く

キサラギ「今です！お願いします！」

重い衝撃音がなる

フロアの人々が衝撃音の方向を見る。いや、何人か下を見てる

目を赤くした僕は目を移動させた

次に、スピーカーを床に叩き落とす。

キド「次はどこだ！」

キサラギ「次は……！　あれです！　あの棚！」

キド「……それは注目云々より、恨み籠ってるだろ」

キサラギ「あはは……ちょっとばかり」

リーダー格の男が拳銃を片手にやってくる

「そこに誰かーー」

フウ「怨念こめて、狙いを定めて、」

キサラギ「せぇのっ！」

「うおおお!?」

リーダー格を棚で叩き潰す。

キサラギ「あとは……」
キサラギさんの視線先には、キサラギさんのお兄さんの駆け出した姿がある
後ろには、ケンちゃんのゆっくり歩いて来る姿があった
キサラギ兄「頼んだぞ……エネ！」
電影が駆け抜ける。ケンちゃんが僕の横を通り抜ける。

ーー二発の乾いた銃声が響いた。
振り向くとパソコンの前で倒れる二人の姿があった。
シャッターが音をたてて上がり始めた。
フウ「二人を見てきます！　キサラギさんあとは任せました！」
二人に近づく、
ケン「いってぇ、　まぁいいや、
　あとはよろしく」
と言って目を閉じる。
フウ「……えっ…ちょ…えっ」

そのあと、皆が来て、キサラギさんのお兄さんがかすっただけとかキドさんと猫目さんのコントがあって僕たちはキドさんたちに付いていき、メカクシ団のアジトに案内された。

夢物語に沈む

運ばれている間、夢を見ていた。

あの、悪夢みたいな冬の日のことだ。

俺があいつのことを知ったのは、小学校の卒業を再来月に控えた1月の関東に珍しく大雪が降った次の日だったと思う。

あの日の昼休み、傘を片手に校庭の歩きまわっていた。体育倉庫の前を通った時に

水のかける音が聞こえた。

何事かと思って音のほうへ歩く。

そしたら、水をかけられたのか、濡れてる人と、その人を囲むクラスメイトだった。

ケン「……おい、お前ら、……なにしてんだよ……」

「おい、行くぞ」

ケン「ちょ、待てよ!」

ケン「どーしよ、これ……」

その人に近づき、しゃがむ

ケン「キミは、どうしてほしいんだ」

少し体を起こして、俺をみたアイツは銀髪で病的な白い肌と

赤黒い目で俺の目を見た。

??「解らない」

俺の耳にかろうじて聞こえた声は弱かった。

ケン「そうか。じゃあ、解るまで居てやる」
??「……いらない……一人でいい」
ケン「おまえ、強がるなよ、」
??「強がってない！……」
ケン「そうか」
ケン「キミは、教室まで戻れるのか？」
??「……戻れるよ」
ケン「……いまの間はなんなんだよ」
立ち上がりながら、傘を持ってない左手で、アイツのことを抱えた。
小学生の俺がアイツを抱えられたのは、部活で鍛えてたのとアイツが予想以上に軽かったからだ

??「ちょ！　ちょっと!!」
ケン「うるさい、暴れるな。」
ケン「おまえ濡れてるから冷たいんだよ。」
その冷たさが水に濡れたからなのか、あの時の俺は解らなかった。
ケン「急に静かになったな。」
??「怖くないの？　私が、」
ケン「さぁね、でも初対面の人に対してこんなことしてるほうが怖いね」
??「……そう……服を着替えたい……」
ケン「この学校で服のある場所か～。　保健室かな？」
昇降口に着いたときに、五時間目の鐘がなった。
??「……いいの？……」
ケン「いいよ、別に」
傘を端に置いて、片手から両手に変えた。
そのまま、保健室へ
ケン「ここまでくれば」
ケン「後は自分でやってね」
??「……うん……」
俺の手から降りるとふらふらしながら、ドアを開けて中に入って

いった。
ケン「大丈夫かよ？」
来た道を振り返り傘をとりに戻る。
ケン「俺、アイツのこと……あんまり知らないな。」
俺は知らなかったんだ。このときまでは、
傘を見つけ、雪をはらって傘入れに傘を入れて、保健室に戻ると、
ちょうど、アイツとばったり会えた。
ケン「待った、待った！」
俺はアイツの手をとって保健室の中に入った。
予想通り教室には暖房が効いていて暖かった。
??「……何……」
ケン「何じゃない、ふらふらの状態でどこ行くつもりだったんだ」
??「……どこって、教室だよ……」
ケン「無理だな、階段登れないだろ？」
俺の言葉にアイツは下を向いた。
ケン「……それに……」
時計を見る。授業はあと１０分ぐらいだった。
ケン「……どうせ、あと１０分だ。　その冷えた体暖めたらどうだ？」
??「……優しく…しないで……」
ケン「……無理すんな」
??「……無理なんて……してない！」
ケン「じゃあなんで、泣きそうなんだよ」
ケン「いいんじゃないか。　別に泣いたって」
この時の涙が俺の見た最後の涙だった。
静かな教室に静かに泣き声が響いた。

ケン「落ち着いたか？」
??「……うん……」

ケン「そうか……とりあえず、俺は3組の水無月　賢太郎だ。　よろしく」
??「……知ってるよ…同じクラスだよ……」
ケン「そ、そうだな」
??「……鳴瀬　雫……」
ケン「雫さんね」
しず「　しずく　で……いい…」
ケン「わかった、俺もケンタローでいいよ」
しず「……ケンタロー……」
五時間目の終わりの鐘がなった。
その日から、俺たちはよく一緒に居ることが多くなったんだ……

体が揺れている感覚がでてきた。
ケン「……んん」
フウ「あっ、起きたー？」
ケン「んー、」
フウ「じゃ　自分で歩いてねー」
ケン「はいはい、」
風太の背中から降りて、前に歩く。
ケン「で、どこいくんだ」
フウ「そ・れ・は～」
猫目「僕たちのアジトだよ～」
フウ「ひどい！　言おうと思ってたのに！」

??「ここだ」
紫っぽい色のパーカーを着た人の前に１０７とかかれた
ドアがあった

入団準備中

―風太ｓｉｄｅ―

ケンちゃんが僕の背中から降りて、歩き始めてすぐ１０７の扉の前に着いた。

キド「ここだ」

ケン「ふ～ん　秘密基地みたいだね」

ケンちゃんの一言にちょっとキドさんは嬉しそうになってた。

キサラギ「団長さん、ちょっと嬉しそうですね」

キド「そんなことない」

猫目「またまた～　嬉しいくｓガフッ」

キド「カノ、おまえは少し黙れ」

ケン「蹴りを炸裂させるのは良いけど、背中に乗ってる人落ちるぞ」

フウ「ねぇ、いつまでドアの前で喋んの」

キド「そうだな、入ってくれ。」

ケン／フウ「お邪魔しま～す」

リビングみたいなところについた

キド「座ってくれ」

ソファに座る。

キド「カノ、とりあえず手当てしろ」

カノさんがケンちゃんの腕とキサラギ兄を手当てしてくれている

ケン「な～んか久しぶりに撃たれた気がすんな」

カノ「なにそれ？」

ケン「う～んと、気にしないで」

キド「カノ、説明しろ」

カノ「まったく、人使いが荒いなぁ」

フウ「発言いい？」

カノ「いいよ～」

フウ「さっそく、僕は文月風太です。」

ケン「水無月賢太郎です。う～んと中2ですよ」
キド「自己紹介か、俺はキドだ、でこっちがカノ」
カノ「カッノで～す、よろしく～」
フウ「うん、よろしく」
自己紹介やってたらキサラギさんがスマホを持ってきた。
キサラギ「私は如月桃だよ」
ケン「……知ってる、なんか大変そうだった」
キド「キサラギ、マリーを説得してきてくれ」
キサラギ「分かりました」
さっきから、一人たりないなと思っていたら、扉を盾にして悪魔を見るような目で見ている。
??「私の紹介もさせてくださいよ～」
キサラギさんのスマホから声が聞こえてきた。
ケン「じゃあ、どうぞ」
??「私は、スーパープリティ電脳ガールのエネちゃんでーす」
ケン「分かった、よろしく」
エネ「スルーですか!?スルー!?」
フウ「うん、そっちの方がいい気がする」
エネ「面白くないですねー。」
ケン「面白さを求められても」
キド「来たぞ」
キドさんの隣に白い髪の人が座った。
??「わ、私……ま、マリーです……」
フウ「よろしくね、マリーさん？」
ケン「なぜに疑問系？」
フウ「なんとなく？」
キド「……カノ」
カノ「はいはい……」
カノさんからの説明を要約すると色々ヤバイ感じのあれだった。
しかも聞いたからには帰さないらしい。
ケン「分かりました、けど少し行きたい場所があるのと、

家に荷物を取りに帰りたいですね」
キド「分かった……いいぞ…ただ、カノを連れていってくれ」
ケン「良いですけど、良いんですか？」
カノ「……ん？　いいよ、いいよ、人使いの荒さは今に始まったことじゃn
グヘッ」
キド「あぁ、大丈夫だ、あと敬語はなくていいぞ」
ケン「分かりました……じゃなくて、分かった。」
ケン「フウタはどうするの？」
フウ「僕は家に荷物を取りにいって、その後……中学校に呼び出しくらってたから
そっちに寄ってから来るわ」
ケン「じゃあ、行って来まっす」
ケンちゃんが扉を開けて、カノと一緒に荷物を取りに行った
キサラギ「私、一緒に行きたいです！」
キド「一緒にって言ったっておまえ」
フウ「良いんじゃない？」
フウ「そうそう、僕の能力は他の人の能力を使えるから」
フウ「……キドさん…手…出して」
キド「なんだ？」
フウ「はい、握手……これでキドさんの能力が使えるからキサラギさんが
来ても良いんじゃない？」
キド「分かった。連れて行っていいぞ」
キサラギ「ありがとうございます！」
フウ「んじゃ、僕も行って来ます」
アジトの扉を開けて、蒸し暑い外に家へ向けて歩を進めた。

帰宅　文月家!?

外に出てきて始めにやることは……っと
フウ「フードかぶってねー……あ、あともう少し僕の方に
　　近寄って」
キサラギ「へ？……あ、うん」
目を赤く光らせる。
フウ「これで、見えないはず、でもキドより範囲、狭いからね」
キサラギ「うん、分かった。」
フウ「じゃあ、まずは学校かな」
学校に向けて歩き始めた。

フウ「到着～、さてと職員玄関は～と」
フウ「……あれ？……誰もいない？」
フウ「……あっ…いたいた……先生、用って何ですか？」
先生「……ん…よう……」
フウ「…ようって、そんなことより!!」
先生「……これを来週までにまとめといて」
フウ「何ですか？　これ」
先生「よろしくな～」
フウ「え？　ちょっと!?　ってもういないし」
キサラギ「……なんか……すごい、先生だね」
フウ「この書類……11月の内容じゃん」
フウ「まっ、いいや」
キサラギ「いいんだ」

フウ「さて、キサラギさん……もうちょい、こっち」
キサラギ「え？　あぁ　ごめんね」
キサラギ「……あ……あと、キサラギじゃなくてモモでいいよ」
フウ「分かったよ、モモ」
フウ「ほら、フードかぶって、家に行こう」

モモ「学校から家まで近いね。」
フウ「まぁね、近さだけが取り柄だからね」
フウ「ただいま～」
モモ「おじゃましま～す」
フウ「そのへんのソファーにでも座ってて、すぐに終わらせる」
モモ「……うん……」
フウ「どうしたの」
モモ「ううんっ！　なんでもないよ！　アイドルだったから友達の家に行くこと無かったなんて無いよ！　うん！」
フウ「……はい、自爆」
モモ「そ、そういえば、お母さんとお父さんは？」
フウ「お父さんの実家に弟連れて帰省中だよ。後、2週間は帰ってこない」
モモ「そうなんだ」

フウ「よしっ、準備完了！　アジトへ行こう！」
モモ「ちょっと待って」
モモ「ねぇ　1週間前にさ、1回会ったことあるよね？」
フウ「さ、さぁ」
モモ「じゃあさ、1週間前に商店街居たでしょ」
フウ「いたよ、僕と目が合っ……あっ」

モモ「ほら、会ったことあるよ」
モモ「1週間前に今日みたいに囲まれちゃったときに」
フウ「……はぁ…」
フウ「会ったよ……もう」
モモ「会ったって言うより助けてくれただね」
フウ「それで？」
モモ「ありがとう」
フウ「別にお礼を言われる為じゃないけど」
モモ「それでも、だよ」
フウ「アジト、行くよ」
モモ「うん」

フウ「ねぇ、近くない？」
モモ「えぇ～、近づけって言ったのはそっちだよ」
フウ「いや……それでもさ、さっきからさぁ」
フウ「肩が当たってるじゃん僕に」
モモ「そう？」
フウ「そうだよ！」
モモ「じゃ　少し離れるね～」
フウ「それでいい」

モモ「やっと着いた～」
フウ「荷物、重いな」
モモ／フウ「「ただいま～」」
キド「あぁ　おかえり」
キド「部屋を用意しておいた、使ってくれ」
フウ「分かった、ありがとう」
キド「ん？　キサラギ、なんか良いことでもあったのか？」

モモ「へ？　良いことですか？　あったかもしれません！」
キド「あ、あぁ　分かった、落ち着け」
フウ「じゃあ、ケンちゃんが帰ってくるまで部屋の整理しときます」
キド「あぁ」

入団準備ｐａｒｔ２　～過去の入口～

アジトの扉を開ける。
すると、夏の蒸し暑い風が顔に当たる。

ケン「カノっち、まずは花屋いくよ～」
カノ「花屋？」
ケン「忘れたの？　今はお盆休みなんだよ。　墓参り」
カノ「あーね～」
ケン「さぁ、いこう」

蒸し暑い空気の中、二人で、花屋にむかって歩く。

??「いらっしゃいませっす！」
ケン「こんにちは、セトさん　いつものね」
セト「了解っす!!」
カノ「……ん？　セト？…って!!　ええ!?　セト!?」
ケン「うるさいよ、カノっち」
セト「これっすよね」
ケン「そうそう、これこれ♪」
セト「……って、あれ？　カノなんでいるんすか」
カノ「いや～それがかくかくしかじかでね」
セト「なるほど、わからないということがわかったっす」
ケン「知り合い？」
カノ「うんうん、なにを隠そうセトはメカクシ団Ｎｏ．２だからね」
セト「隠すのはキドの仕事っすよ。」
ケン「じゃあ、これからお世話になるわけだ」
ケン「改めて、よろしくお願いしますね、セトさん」

セト「よろしくっすよ」
ケン「それじゃ、行くとこあんので。
　　これお金」
セト「ありがとっす。カノ、もう少ししたらあがるっす」
カノ「りょ～うか～い」

花束を手に墓へむかって歩き出す。
むかってる途中でカノが話しかけてきた

カノ「そういえばさー、誰のお墓なの」
ケン「そうだな～、”大事な人”かな」

俺のただならぬ雰囲気を察してカノはそれ以上聞いてこなかった。

墓についたら、花束を置いて墓石を掃除する。
もう慣れたもんだ。
カノが手伝ってくれたのもあってすぐに終わった。

カノ「鳴瀬　雫津久さんね。どんな人だったの？」
ケン「え～とね、はじめて会ったのは小６の最後のほうで、
　　アイツがいじめられてんのを助けたのだったかな」
ケン「そして、この目を移動す能力の前の持ち主だよ」
カノ「……え？」

夕暮れのカラスが鳴き始めるころ

カノ「そんなことが、言葉が出てこないけどさ、お疲れ様」

ケン「俺はこれをはじめて人に話した。誰にも言わないでな」
カノ「……？　なんで？」
俺は自分の胸に手を置いて
ケン「思い出は心のなかに」
カノ「わかった」
いつの間にか家に寄って荷物を持ってアジトに着いていた。
ケン「そんじゃ、まっ、いつも通りのテンションで
ただいま～」
マリー「あっ、おかえりなさっ……!!……あぁ!!」
アジトに入るとそこは紅茶で染まっていた
”ホット”　の
ケン「あ゛っ゛づぃ゛～」
フウ「ケンちゃんごめーん、ホットお願いしたの、ぶくだぜ★」キラーン
マリー「ごめんなさい、ごめんなさい……」
超キメ顔な”フウタ”、『ごめんなさい』連呼の”マリー”、大爆笑の”カノ”
タオルを持ってきてくれた”キド”、マリーを落ち着かせている”セト”
フウタに呆れている”キサラギ”、ベッドで横になってる”キサラギ兄”
退屈しなさそうだ。
まずは、

ケン「マリー、俺は大丈夫だよ」
マリーを落ち着かせる。
次は、

ケン「オイ、ふうたキメ顔のくせして噛むんじゃねー!!」
キサラギ「私もそう思うな♪」
フウ「くっ、ツッコミが二人にっ!!」
ケン「カ～ノ!!いつまで笑ってんの!!」
カノ「ぶっｗｗｗ、だってｗｗこ、ｗｗｗｗ紅茶のｗｗｗｗマリーｗｗさいｋ」

返事がないただの石ころのようだ

ケン「マリー、落ち着いて～固めたところで邪魔だよー」

落ち着いてきたところで

ケン「キド、ありがとう。　シャワー貸して」
キド「ああ、いいぞ、使ってこい」
ケン「ありがとう。それと、”メカクシ団”入るよ」
ケン「楽しそうだから」

長い夏の午後

ザァァーーー

現在、メカクシ団のアジトでホットな紅茶を頭から浴びたのでシャワーを借りていた。

ケン「キド、シャワーありがと」
キド「ああ、大丈夫か？」
ケン「大丈夫、大丈夫、ね？　ってあれ？マリーは？」

セト「こっちにいるっす」
ケン「ほんとだ、マリー、俺は大丈夫だよ、気にしないで～」
キド「ところで、なんだが入団おめでとう、歓迎する」
ケン「歓迎されました。」

フウ「ケンちゃーん助けて」
ケン「えー、なになに、あららフウタ先生がカノに捕まっちゃってる」
フウ「そうなの、助けて、ｈｅｌｐ！」
ケン「　無　理　☆　末長く、爆発しやがれ」
天下の超スーパーアイドルとイチャイチャしてるんだ。これ見たら、ファンは血涙、カノには笑顔だ
エネ「そうですよー、どうせなら、二人同時にドーンって殺っちゃいましょう！」
ケン「良いね～、景気よくドーンってね」
モモ　／　フウ「「やめて、ダメだから!!」」
ケン　／　エネ「「おぉ～、見事なシンクロ　って」」
あっちがキレイに合わすもんだからこっちも合わさっちゃったよ

マリー「みんな、お茶、入れたよ……あぁ!!」

マリーがコケそうになった瞬間、俺がマリーの持っていたお盆を取り、フウタ先輩がマリーを抑える。

これで、誰も濡れないし、コケない。

ケン「ふぅー」

フウ「……た……呼んだ？」

ケン「お呼びじゃねーよ」

ケン「疲れた、紅茶、貰って良い？」

一応、マリーに聞いてみる。

マリー「……良いよ…」

セトの背中に隠れながら、ちっさい声で言った。

ケン「ありがとね、マリー」

紅茶を取って、飲む。

ケン「ところで、キサラギさんとフウタなんかあったの～？」

フウ「い、いろいろあったんだよ…」

ケン「いろいろ……？　あっ！あー」

フウ「なにを納得してるのか知らないけど、ものすごく嫌な予感がする」

ケン「まっ、良かったじゃないか、これで、非リアと陰キャ脱却だね」

フウタの肩に手を置きながらｇｏｏｄサインをする。

フウ「まだ、そのユニークスキルなら持ってるって」

ケン「そんなユニークスキルいらねー！」

フウ「おまえのスキルスロットにも両方入ってるだろ！」

ケン「あ……うん…そ、そんｎ」
カノ「そんなことあると思いまーす」
ケン「えぇー」
フウ「残念だったな、諦めろ」
ケン「その言葉、そっくりそのまま、ブーメラン」
フウ「なんてこった」

そんなこんなで、夜になって明日はキサラギ兄が起きしだい皆で遊園地に行くことになった。
キサラギ兄には心の中で合掌をしておいた
寝起きで遊園地……うん、死ねるわ

明日に備えて皆、寝たわけなんだけど、目が冴えちゃって寝られないのですよ
だから、ベランダに出て星が見えない空を見上げて、今日カノになぜ昔のことを話したのだろうと考えてた
多分、答えはわかっている

だから……

水無月　賢太郎の過去

あれから雫へのいじめはめっきり減った。
減ったというよりは俺が脅して止めさせた。でもまぁ小学生のできる脅しなんてたかが知れてるけどな
ケン「また、雫は休みか……アイツ、卒業式出れるのか？」
ここのところ3日連続で休み続けている。来週は卒業式だ。
ケン「アイツの家どこだったかな？」

放課後
「ケンタロー、遊ぼうぜー」
ケン「嫌、行かないよ、行きたいところがあるから」
「なんだよー、ノリわりーな」
ケン「悪いな」
荷物を持って、２つ下の学年の弟のクラスへ歩を進める

ケン「誠史郎、家の鍵やるよ」
セイ「えっ、今日、俺、練習だよ？」
ケン「いいよ、いいよ、今日帰りが遅くなると思うから」
振り向いて、誠史郎に後ろ向きで鍵を投げる。
セイ「ちょ、え！」
ケン「じゃあ、後でね」
教室を出ようとした俺に誠史郎の担任に
「気をつけて帰ってくださいね、３日前の警察官を襲った犯人が捕まっていないらしいので、さらに警察官から銃を奪って逃走中なので真っ直ぐ帰ってください」
そう言われたけど真っ直ぐ帰る気なんて微塵もなかった。今は自分のことより雫のことが心配だった。
部活を引退した俺は荷物を持ったまま雫の家に向かった。このこ

とを未来の俺はもっと早くにアイツのところに行ってやれば良かったと後悔することになる。

雫の家に着いたとき、俺は絶句した。止まっていたと思っていたことが続いていたんだ。ある意味廃墟の様な雰囲気にプラスして、冬の午後の暗さと家の壁中に貼られている一見すると落書きの様に見えるそれは雫への数々の罵詈雑言だった。

ケン「なんだよ、これ」

雫の周りが見えていなかった悔しさと自分の情けなさを押し殺して、貼り紙を剥がしていく。

ゴトッ!、ドンッ!!

ケン「!?、なんの音だ?」

近くの窓から中を覗く、、、

カーテンの隙間から見えたのは、赤いナニかが壁にべったりとついているその前に縛られて倒れている雫を見下ろす男の姿だった。

ケン「しずっ!?ハッ!」ガンッ!

頭に響く鈍痛、後ろに立たれていたことに気づいたのが遅く振り向いた時にはすでに長い棒を振りかぶった男がいた。頭に響く鈍痛のおかげで思うように体が動かず、2発目も叩きつけられる。

ケン（まさか、コイツら3日前からここに?なんで、雫の家に?……）

俺の問いに答えてくれる人は誰もいなかった。そのまま俺は意識を失った。

……　目が覚めた時、一番最初に目に映った光景は今まで自分が生きてきた中で、いや人生で最低最悪の光景だった。

友達の光を失った瞳とその先にある血にまみれている友達の母親

だった。……

消えた少女

ケン「……」
壁に寄り掛かっていた俺は視線を上げる。
シズク「……ん」
雫と目が合った。さっき見た目だ。さっき見た光景が本当なら、なんと声をかけてあげればいいかわからない。首筋にポタポタ液体がかかる。
ケン「なんだ、これ」
手で首筋の液体を取って見る。
ケン「ひっ⁉?」
その手には赤いヌメッとしたものがべったりと付いていた。上から垂れてきたってことは……
シズク「ダメッ」
ケン「うっ!?」
雫が急に動いて上を見ようとした俺の顔を逸らした。けど、そんなことに意味はなかった。
見えた……見えてしまった。血塗れになり、自分の寄り掛かっている壁に貼り付けられている雫の母を……
どうする!どうする!なんなんだこれは!?夢なら覚めてくれ!!こんなの雫が……
シズク「わ、わたしは大丈夫……」
ケン「大丈夫な訳!!　いや、落ち着け、俺」
雫が大丈夫じゃないのは良く見なくても分かる。目が死んでる。光がなくなってこの状況の辛さを物語っている。
雫の手が震えている。そりゃあそうだ、俺が少し冷静に考えていられるのも雫のおかげだ。
雫の手に俺の手を重ねる。なにもしないよりマシだ。
どうする、俺。考えろ!今何時だ。……5時か…誠史郎が帰るのは、6時半ごろだから最短でお母さんがおかしいと思うのは、2時間後だな

目の前に窓があるけど、行けるか？いや、まず、状況は走れるのか？

厳しいだろうな。俺も走れるかわからないし、どこからあいつら見ているかわからなしな。

俺の鞄⁉？　そうだ、俺の鞄どこだ。

鞄を探して、キョロキョロ部屋を見回す。

シズク「……ん……」

ケン「ありがと、なんかないか」

鞄つーかランドセルの中にはノートと筆箱、防犯ブザーがあった。1番使えそうなのは防犯ブザーぐらいか。

いつ使う？そもそも、バレないで持っていられるか？あとは……

シズク「……落ち……ついて…」

ケン「落ち着いてるよ⁉……ごめん…」

怒鳴ってしまった。なんなんだ。もう…

「おうおう、やかましーぞ、テメーら！」

勢い良く扉を開けて部屋に入って来たのは、俺を殴った奴だった。

ケン「……」

「んだよ！その目はよっ！」

胸ぐら掴まれて壁に叩きつけられる。雫のお母さんの目を見てしまった。

ケン「……なんでこんなことを……」

「あぁ！　冥土の土産に教えてやるよ」

雫を指差して男が

「このガキの目が赤くなるんだと、珍しいからとっ捕まえろ。つー依頼が来たわけよ。いい金になるからな」

ケン「ならなんでまだここにあるんだよ」

「金持ってここで交換なのさ。聞きたいのはそれだけか」

確認に来ただけだったのか。男はあっさり戻って行った。

時間は7時、早ければそろそろ心配してくれてるはずだ。あと、

さっき投げられた時に上着のポケットになにか入っていた。
ケン「これはラッキー」
携帯だ。前、遊んだ時入れっぱだったの忘れてた。
確認はもうしばらく来ないはず、今なら！
携帯開いて、メールを送る。この場所となにが起きてるかを。

よしっ、送れた。あとは待つだけ……

……寒いな。
ケン「よいしょっと」
年寄りクサイ台詞を吐いて立つ。ほとんど部屋着の雫がガタガタ震える前にあったまるものを
ケン「っとと」
袖を引っ張られた。
シズク「……寒い……動か…ないで……」
ケン「はいはい」
雫の隣りに座り直す。上着を脱いで、雫にかける。多少はマシだろう。

メールを送って1時間、そろそろアクションを起こしてくれてもいいんだけどなー
サイレンの音⁉？やった！
すると、確認の時よりも強く扉を開け放つ男達。相当お怒りのようだ。右手に持った拳銃を今すぐにでも撃ちそうなくらい。
「テメェら!!なにしやがった!!」
雫が俺の背中に抱きつく。こんな状況じゃなければ何かを感じたかもしれないけど今じゃない。
雫はすぐに離れた。そして、雫のもとで何かが落ちた。俺の携帯だ。

……雫、まさか⁉？
「テメェか！連絡したのは!!」
拳銃が雫を向く。
ここからは勝手に体が動いた。引き金が引かれる直前に雫の前に出た俺の体を弾丸は貫いた。貫いてしまった。
いままで感じたことのない痛みを死ぬ気で押し殺して雫を見る。雫は力なく倒れて、血溜まりが出来、ゆっくり俺の血溜まりとくっついていた。
俺の体を貫通した？……膝に力が入らず俺も倒れた。後ろでたくさんの人がいるのが血に反射してみえた。けどそんなことはどーでも良かった。
ケン「な…んで……そんな…」
雫の目は赤かった……

ケン「……ここは……」
俺が目を覚ましたのは、あれから3日後だった。話を聞くとあそこにいたのは俺と男だけだったらしい雫の姿は誰もみていないとその話を聞いたあとトイレで
ケン「なんでだよっ!!」
鏡を殴る。鏡は割れずに手から血が滲み出た。
ケン「あれ？　目が……

……赤い」

彼の知らない真実

頬を伝うなにかの感触で目が覚める。
……また、ここか…

薄暗い室内、銀髪の女の子、足元の気持ち悪い血溜まり。
シズ「また……会った…」
「……僕だけを呼ぶ意味は何？」

シズ「……特にない……」
「なんの間？……ま、いっか。久しぶり鳴瀬さん」
シズ「……誰？」
「!?……文月風太。そっちが呼んだのに」
さて、おしゃべりはここまでにしてやるべきことをやらなくてはいけない。

ポタポタ垂れてくる血が気持ち悪いから立ち上がって顔の袖で拭く。袖が赤くなっちゃったけど、夢の中だから関係ないＺＥ！とは言え濡れてキモい。

フウ「ポケットには、たしか……あった携帯」

シズ「……慣れ……てる……」

フウ「何度目だと思ってんのさ」

このケンちゃんの夢で重要なのは時間だ。今は５時過ぎか……てことは

バタンと扉が開いてモヤっていうか霞の塊がこっちまで来て僕を持ち上げて壁に叩き付けた。

フウ「…っ!!……」

わかってたけどやっぱ痛い!!夢の中なのに痛みがあるってどういう事だと最初の頃は思ってたけど、もういいや……

僕を投げ飛ばして満足したのかスタスタと歩いて部屋の外に帰っていった。５回目あたりからこれに関してもなにも感じなくなってた。

フウ「……はぁ……」

シズ「つか……れた」

フウ「僕のセリフなんだよなぁ」

この人はよくわからない、息を吐くようにふざけるから大変さが増している気がする。

ヒュゥゥーーーっとどこかから風が入ってきた。寒い、寒すぎる。ケンちゃんなんでこんな薄着なのさ。鳴瀬さんもアホみたいに薄着だ。

フウ「寒くないの？」

シズ「私は夢を……作った、から……寒くない」

フウ「……」

ずるい、最高にずるい。はぁ……じゃあ凍える前に終わらせよう。

次のステップだ。ポケットから携帯を取り出して、情報を外に流す。ここから1時間、待機だ……

この夢最大の違和感、が起きる時間だ。
サイレンの音が聞こえる。おかしい、普通ならこういう時はサイレンの音はしないはず
僕の違和感をそっちのけで時間は進む。ドカンと扉が取れるんじゃないかってぐらいで開け放たれる。やっぱり霧だ、銃だけははっきり見えるのは悪趣味だと思う。
ここで鳴瀬さんが僕によって来て携帯を盗んで離れる。その流れのまま携帯を落とす。
霞の向きが鳴瀬さんに移ると銃を構えて引き金を引いた。体を盾にするため跳び出す。はず、いつもこうして夢は終わる。
「……!?」
鳴瀬さんに引っ張られ銃の弾は僕に当たらない。……いつもと違う!?撃たれた鳴瀬さんが力をなくして倒れ、ゆっくりと血溜まりが出来上がっていく。
視線を霧に戻すと霧が人に組み伏せられていた。この人……はっきり見える。なんだどうなってるんだ。

僕が悩んでるうちに病院に着いた。鳴瀬さんも運ばれ、一命を取り留めたと聞いた。今は鳴瀬さんの病室に向かっている最中だ。

えーと、この曲がり角で右に……あの人がいる！　とっさに柱の影に隠れて観察する。
鳴瀬さんの病室の前に助けてくれたはっきり見える人がいた。やっぱり、この人だけはっきりと見える。医者も看護師も霞だったのにこの人だけ……
……消えた!?？　……
またばたきをした一瞬で跡形もなく消え去った。なにか能力でも

持ってるのか？いや、でも
鳴瀬さんは…
病室に入って、ベッドを確認すると人がいた形跡が一切ない。
足になにかが当たる。
フウ「紙？……なんか書いてある」
拾い上げて書いてあることを読み上げる。
フウ「『ｈｉｄｅ　ａｎｄ　ｓｅｅｋ』かくれんぼ？」